

やまがた地球家族

YAMAGATA GLOBAL FAMILY



『協力隊を支援する やまがた地球家族の会』機関誌 VOL.4

【国際力を高める企業懇談会】を開催

2006年11月8日(水)、【国際力を高める企業懇談会】が山形県国際交流センターにおいて開催されました。投資環境・国際協力などをトータルに視野に入れながら、これからの国際化と国際力アップを考えると同時に、開発途上国に派遣されている青年海外協力隊や各種専門家、シニアボランティアなどについて企業・事業所等からの理解・協力を深め



ていただくのが狙い。参加企業は24社に上り、国際化への関心の高さが伺えました。

はじめにJETRO(日本貿易振興機構)から、《本県企業の国際化の現状と課題》と題した説明がありました。高い技術力を持つ県内企業の海外でのビジネス展開が進まない理由として(1)貿易ノウハウの不足(2)語学力不足、の2点を挙げました。東京で活躍している出来上がった人材を雇ってくるのではなく、本県出身の協力隊OBのように県内風土を理解できる若い人材を育成していく重要性が強調されました。

(2頁へつづく)

日本では体験できない出来事との遭遇が学びに

協力隊を支援するやまがた地球家族の会 副会長 斎藤栄司



エクアドルで音楽の指導をしていた佐藤敏幸さんは1年たった時に職場の同僚に「もう、あなたから学ぶものはない。」と言われたそうです。そこで彼は周りの学校に売り込みに行き、後半の1年は3つの学校を巡回指導し、大変充実した活動を行うことが出来たそうです。佐藤さんは「自ら動くことが大事だということを学んだ。」と語ってくれました。

ブータンに派遣された高橋わかさんはブータンではお墓がなく先祖を祭ることがないことに驚いたとのこと。「死とはなんだろう?」と考えさせられたと話してくれました。

私自身もバンングラデシュから帰国して20年になりますが、誠実に人に対応することの大切さを学んだのは協力隊活動での現地の人たちとのやり取りからだっと思ったと思います。様々なことを学ばせてくれる青年海外協力隊事業をこれからも応援していきたいと思っています。

(1 頁からのつづき)

次に JICA（国際協力機構）から、《企業の海外展開と海外ボランティア》と題した説明がありました。(1) 協力隊 OB には、適応力／忍耐力・異文化への柔軟性・高いコミュニケーション能力が備わっている (2) 協力隊 OB を雇用することで企業の社会貢献イメージアップにつながり、海外でのビジネス展開にも役立つ、という 2 点を指摘しました。また「協力隊 OB のための特別採用枠を設ける自治体が増えている。」「JICA では 1 人あたり 800 万円近い費用をかけて語学などの研修を行なっている。その成果を一般企業にも活用してほしい」とも述べ、帰国隊員の活用を訴えました。

更に SOJOCV（協力隊を育てる会）からは、雇用者側の負担を軽減して、現職参加（職場に籍を残したまま、協力隊に参加すること）を促す仕組みとして、隊員の所属先に対して JICA が人件費を最大 8 割補てんする制度が紹介されました。



次のコーナーでは《青年海外協力隊：そのビフォー・アフター》と題して、2 名の協力隊 OB が体験談を発表しました。

ガーナでデザインを教えて帰国した半田奈央美さんは、県内の設計事務所すべてに履歴書を送ったが、面接にこぎつけたのは現在勤務する会社だけだったという逸話を披露。

また元 TV カメラマンの渡辺直樹さんは、モロッコへ派遣され、視聴覚教育に携わりました。帰国後は映像系の会社を起業しました。

その後、及川洋さんをコーディネーターに迎えて、意見交換が行なわれました。参加企業からは、「元隊員の採用や在職社員の海外派遣は、これから企業の国際マインドを高めたり、海外へのネットワークを厚くするうえで大いに考えていかなければならない」「県内から多くの協力隊員などが派遣され、活躍していることは大変素晴らしいことだと認識を新たにした」など、様々な意見や感想が寄せられました。(了)

●平成 18 年度 協力隊を支援するやまがた地球家族の会 事業報告

期 日	事 業	場 所	参加者数
4 月 9 日	青年海外協力隊募集相談会	出羽庄内国際村	10 名 (内、応募希望者 2 名)
5 月 20 日	定例総会	鶴岡市中央公民館	40 名
6 月 21 日	18 年度 1 次隊壮行会	山形県庁	10 名
9 月 25 日	18 年度 1 次隊後期壮行会	山形県庁	12 名
10 月 7 日	映画『アサンテ・サーナ』上映会	山形市中央公民館	13 名
10 月 25 日	青年海外協力隊募集相談会	出羽庄内国際村	15 名 (内、応募希望者 6 名)
11 月 8 日	国際力を高める企業懇談会	山形県国際交流センター	24 社・52 名
12 月 2 日	ミャンマー留学生との交流会	出羽庄内国際村	24 名
12 月 21 日	18 年度 2 次隊壮行会	山形県庁	11 名
3 月 4 日	ボランティア家族懇談会及び帰国報告会	遊学館	53 名
3 月 23 日	18 年度 3 次隊壮行会	山形県庁	10 名
※ 5 月 20 日	機関紙第 3 号 発行		

4 作品、2 校が入賞！ ～国際協力エッセイコンテスト

2006 年度【JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト】が開催されました。応募総数は中学 28,123 作品・高校 15,962 作品に上りました。その中から 3 回の選考を経て、中学校は 119 作品、高校は 96 作品の入賞が決定。山形県内から見事入賞した 4 作品をご紹介します。※学校・学年は応募当時

なお、学校賞として県内からは、山形大学教育学部附属中学校と山本学園高等学校が表彰されました。

中学生の部

★入選

【感謝の気持ちを忘れない】

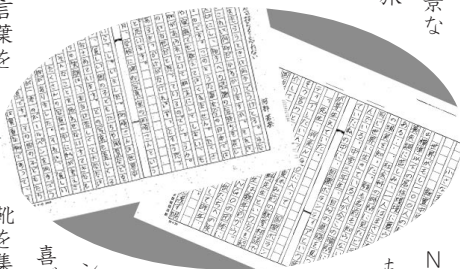
阿部 若奈さん

(鶴岡市立鶴岡第三中学校 3 年)

「何かをもらうときは両手でうけとる」動作が、「物を大切に、相手への感謝の気持ちを表している」ことを、阿部さんは一枚の写真を通して初めて知る。それは「世界中を旅し、貧しい国の子どもたちや風景など」を撮影している旅行写真家の岡崎さんの、「貧しい国のあの少年が一本のボールペンを両手でうけとっている写真」。

「もったいないという言葉が世界で共通語になっている」のに、「日本で生まれたこの言葉を一番忘れてるのは私たち」だと阿部さんは気づく。給食を残したり、物を粗末にしたり、学校に行ける幸せを忘れたり・・・

「今まで当たり前だと思っていた事は、実は当たり前前事ではないのです。そう感じた今だからこそ感謝の気持ちを忘れずに頑張りたい」と決意する。



★青年海外協力協会会長賞

【小さな支援を】

青木 千恵佳さん

(飯豊町立飯豊中学校 3 年)

「将来 NGO に入って、国際ボランティアしたいんだあ。」社会科の時間に見た《世界がもし百人の村だったら》ビデオがきっかけで、青木さんは国際ボランティアに興味を持つ。

NGO 《国境なき子どもたち》で活動する菅野先生との出会いを通して、カンボジアの現状を知った青木さんは、「履けなくなった靴や、使いがけで忘れられているものは、現地ではとても喜ばれると聞いたから、靴を集め始める。友人たちの協力もあり、「現在三十六足達成だ！」

「今の私にできること」を実践しながら、青木さんはこう訴える。「世界がもし百人の村だったら、八十人の人が待っている。あなたの、私の、小さな支援の手を。」

★入選

【スラム・シアン！】

笹原 英海さん

(山形県立庄内農業高等学校 2 年)

学校の先輩からスマトラ沖地震チャリティ公演に誘われた際、「荒れ果てた海を背に、なんとも不安げな顔をしている一人の少女」の写真を見て、その少女の笑顔が見たいと参加した笹原さん。地元企業からの協賛金も集まり、《スマトラ里親の会》を通じて、三人の里親になった。

「不安げな顔」をしていたサイランは「キラキラと水が反射した瞳」で明るく笑うようになり、医者になる夢を持ち始めた。「私

が、後輩に子供達の事を伝えなければいけない。人と人の絆から生まれた笑顔が「より強い人と人との架け橋になると信じて、来年のチャリティ公演に臨もう」と心に誓う笹原さんは、その笑顔に向かって「スラム・シアン！」(インドネシア語で「こんにちは」と声をかける。



★青年海外協力協会会長賞

【トーゴとの出会いから】

高橋 晃さん

(山形県立霞城学園高等学校 3 年)

「甘いのが大好きで、お菓子をかう代わりに」ダイエツト募金を始めた高橋さんは、フォスター・プラン(支援国を指定して寄付金を提供し、支援地域の子どもと交通する)を通して、トーゴという国と出会う。地図

や資料だけではピンと来なかったが、「送られてきたフォスター・チャイルドの写真や交換する手紙で実感がわいた。」総合学習の時間を利用してトーゴについて調べてみると、マラリアと人身売買について日本とも意外な関わりがあることに衝撃を受けた。

「トーゴとの出会いから、世界で起きていることを知った」高橋さん。サッカーW杯にトーゴが出場したことが「自分の国のこのように嬉しくなりました」ほど、「以前よりも特別な存在になった」。

高校生の部

今回ご紹介した 4 作品は、JICA ホームページで全文を読むことができます。

→ <http://www.jica.go.jp/branch/tohoku/gaiyou/essay.html>

2007 年度の応募受付期間は 6 月 1 日～9 月 21 日。お問合せは JICA 地球ひろば 03-3400-7717 (代) まで。

～協力隊員の活躍が新聞で連載中～

山形新聞に連載中の『世界が舞台 ～活躍する県人』という記事にご注目！協力隊員の現地での奮闘ぶりを描いています。

5/16 掲載の伊藤瑠里子さんはゆっくり流れる“ジンバブエ時間”と人々の明るさに驚きます。

5/23 掲載の三宅夏子さんは中国蘭州で、氷点下



15度の冬を乗り切るために長ジュバン・モモひきセットを購入。

6/6 掲載の伊藤祐子さんはタンザニアで、村人たちと協力して水力製粉所の建設に取り組んでいます。

「青年海外協力隊募集相談会」開催

2007年5月9日、出羽庄内国際村にて青年海外協力隊募集相談会を開催し、3名の応募希望者が参加しました。歯科衛生士、環境教育など志望職種は様々。OBとの懇談では、試験や研修の実態、自分のキャリアと応募職種の関係などについて尋ねていました。

現在派遣中の今野美保隊員の留守家族もご参加。「心配で心配で、現地で支給された携帯電話から自宅に電話があった時にはホッとした」と述べておられました。



※写真は Wikimedia Commons "Landscapes of Tanzania" より

映画《アサンテ・サーナ》上映会

二〇〇六年十月七日、山形市中央公民館において映画《アサンテ・サーナ》わが愛しのタンザニア》上映会を開催しました。

第四回地球の文化祭に合わせた企画でしたが、PRと集客に課題を残しました。

一九七五年、協力隊事業十年を記念して製作されたこの映画は、青年海外協力隊が全面協力し、タンザニアでの半年に渡るロケの末に完成したものの。その映像美と隊員たちの思いは、三十年経った今も魅力的です。

『協力隊グッズ』プレゼント！

★抽選で1名様に「協力隊グッズ」をプレゼントします！ご希望の方は、ハガキに住所・氏名・年齢・「協力隊グッズ希望」とお書きの上、下記事務局までお送りください。☆応募締切 2007/7/31 消印有効 ※当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。



☆お問い合わせ／ご入会のお申し込みは、当会事務局まで。

やまがた地球家族 Vol.4

平成19年6月16日発行（第4号） 発行人／酒井忠久

発行／〒999-7725 山形県庄内町沢新田 151 富樫方 『協力隊を支援する やまがた地球家族の会』事務局
TEL&FAX) 0234-42-1458 (富樫) E-mail) info@chikyukazoku.org Website) http://www.chikyukazoku.org/

■協力隊を支援する『やまがた地球家族の会』入会のご案内

【会費】 ●個人会員＝3000円 ●家族会員＝1000円(個人会員の家族) ●学生会員＝1000円 ●団体会員＝10000円(企業及び団体)

【会員特典】 JICA ボランティアの姿を通して、世界が見える！「国際ボランティアマガジン 月刊《クロスロード》」を、年間購読料5000円のところ、希望する会員には2000円の送付手数料のみで1年間12冊ご提供いたします。